

掟の門前

カフカ／池内紀訳

掟の門前に門番が立っていた。そこへ田舎から一人の男がやって来て、入れてくれ、と言った。今はだめだ、と門番は言った。男は思案した。今はだめだとしても、あとでならいいのか、とたずねた。

「たぶんな。とにかく今はだめだ。」
と、門番は答えた。

掟の門はいつもどおり開いたままだった。門番が脇へよつたので男は中をのぞきこんだ。これをみて門番は笑った。

「そんなに入りたいのなら、おれにかまわず入るがいい。しかし言つとくが、おれはこれとおりの力持ちだ。それでもほんの下っぱで、中に入ると部屋ごとに一人ずつ、順ぐりにすごいのがいる。このおれにしても三番目の番人のみただけで、すくみあがつてしまう

ほどだ。」

こんなに厄介だとは思わなかった。掟の門は誰にも開かれているはずだと男は思った。しかし、毛皮のマントを身につけた門番の、その大きな尖り鼻と、ひよろひよろはえた黒くて長い蒙古ひげをみていると、おとなしく待っているほうがよさそうだった。門番が小さな腰掛けを貸してくれた。門の脇にすわつていてもいいと言う。男は腰を下ろして待ちをつづけた。何年も待ちつづけた。その間、許しを得るためにあれこれ手をつくした。くどくど懇願して門番にうるさがられた。ときたまのことだが、門番が訊いてくれた。故郷のことやほかのことをたずねてくれた。とはいえ、お偉方がするような気のないやつで、おしまいにはいつも、まだだめだ、と言うのだった。

たずさえてきたいろいろな品を、男は門番につきつきと贈り物にした。そのつど門番は平然と受けとつて、こう言った。

「おまえの気がすむようにもらつておく。何かしのこしたことがあるなどと思わないようにな。しかし、ただそれだけのことだ。」

永い年月のあいだ、男はずつとこの門番を眺めてきた。ほかの番人のことは忘れてしまった。ひとりこの門番が掟の門の立ち入りを阻んでいると思えてならない。彼は身の不運を嘆いた。はじめの数年は、はげしく声を荒らげて、のちにはぶつぶつとひとりごとのように呟きながら。

*
手をつくす
不運を嘆く
声を荒らげる

②

そのうち、子どもっぽくなった。永らく門番をみつめてきたので、毛皮の襟にとまった蚤にもすぐに気がつく。すると蚤にまで、おねがいだ、この人の気持ちはどうにかしてくれ、などとたのんだりした。そのうち視力が弱ってきた。あたりが暗くなったのか、それとも目のせいなのかわからない。いまや暗闇のなかに燦然と、旋の戸口を通してきらめくものが見える。いのちが尽きかけていた。死のまぎわに、これまでのあらゆることが凝結して一つの問いとなった。これまでついぞ口にしたことのない問いだった。からだの硬直がはじまっていた。もう起き上がれない。すっかりちぢんでしまった男の上に、大男の門番がかがみこんだ。

「欲の深いやつだ。」

と、門番は言った。

「まだ何が知りたいのだ。」

「誰もが旋を求めているというのに。」

と、男は言った。

「この永い年月のあいだ、どうしてわたしのほか誰ひとり、中に入れてくれと言つて来なかったのだろうか？」

いのちの火が消えかけていた。うすれていく意識を呼びもどすかのようには門番がどなった。「ほかの誰ひとり、ここには入れない。この門は、おまえひとりのためのものだった。さあ、もうおれは行く。ここを閉めるぞ。」

*
——
*
ついで……ない
欲の(が)深い



カフカ

一八八三年——一九二四年
ドイツの小説家。人間存在の根源にある不安を、鮮烈なイメージと寓意に満ちた異様な世界の中に描き出し、二十世紀文学に大きな影響を与えた。主な著作に、『変身』『審判』『城』などがある。『旋の門前』は、一九一五年、雑誌『ゼルプストヴェーア』に発表。本文は『カフカ小説全集』(二〇〇一年刊)による。

①の「きらめくもの」とは。

②が示している「欲」とは何か

〈全体を讀んで〉

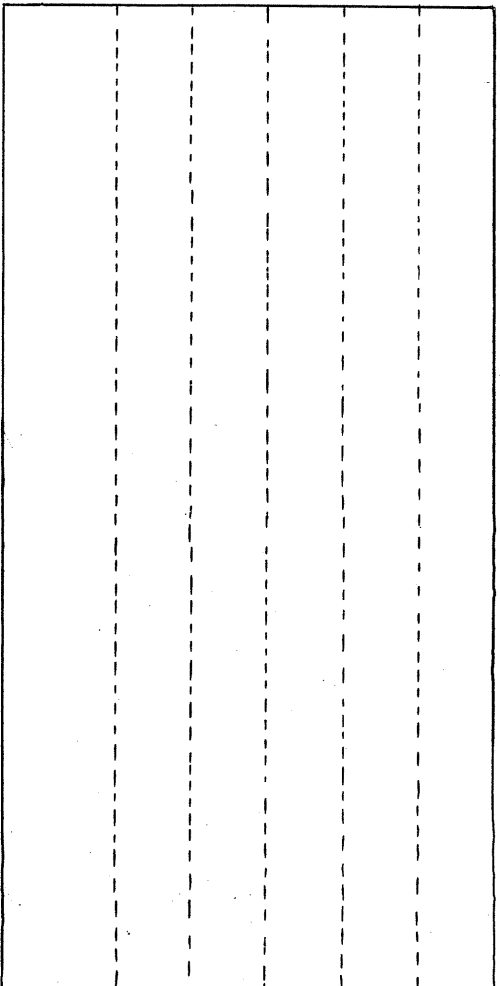
物語に出てくる「門」「旋」とは何なのか。

◆「一つの問い」とは、
どういう問いか。

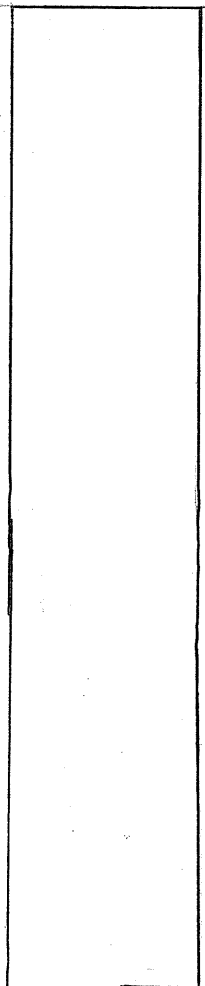
H25年度 読書会アンケート

題材: 「提の門前」 カツカ

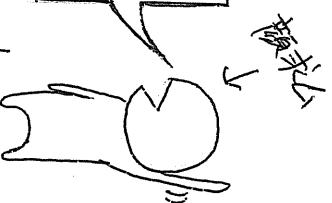
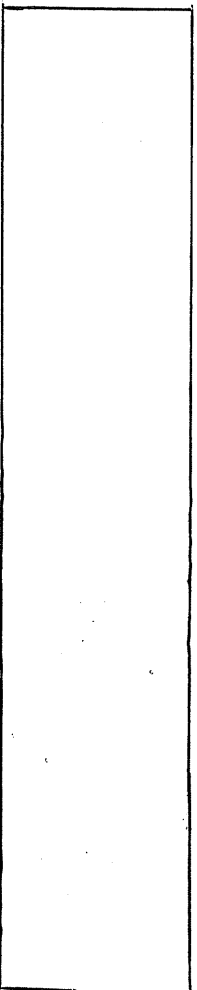
今回の読書会はどうでしたか。
詳しい感想をお願ひします。



改善点がありましたらお願ひします。



次の読書会が取り上げたい欲しい本等はありませんか。
著者名、本名、ジャンル etc
何冊自由に書きまくってください。



ありがとうございました。

図書館文化行事班